

## 第6節 瓦溜まり

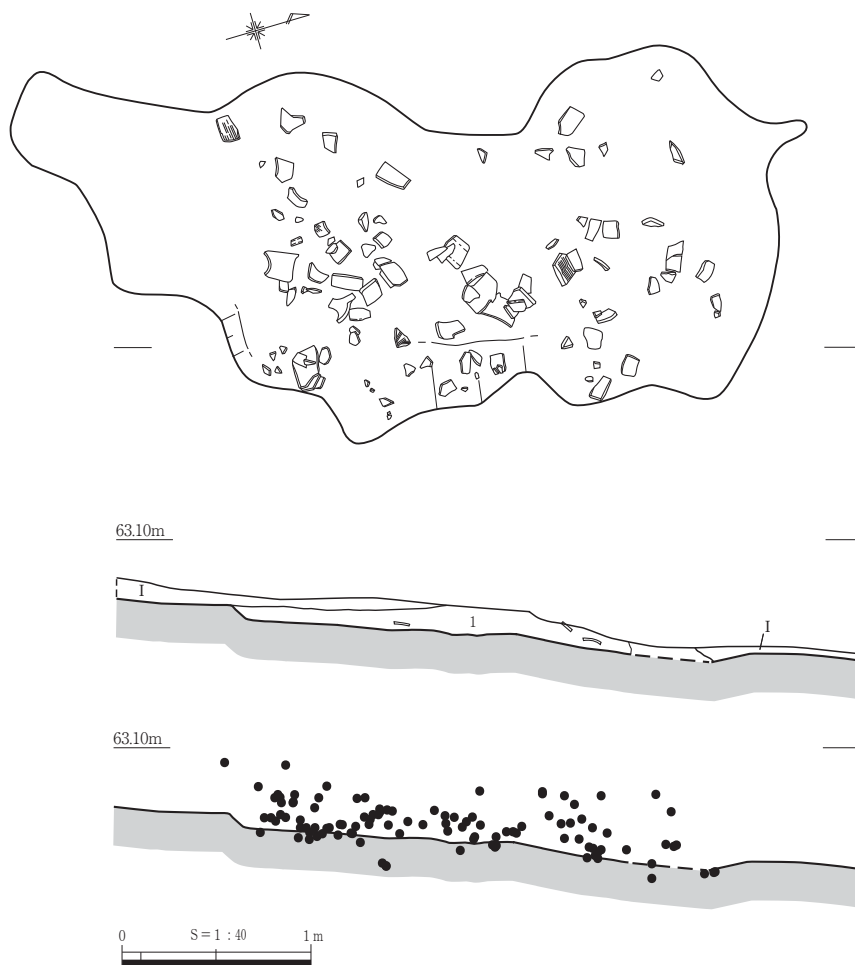
## 瓦溜まり1 (第213～218、221～229図、PL.53-1～4、114-2、115～116-1)

F11グリッド、標高62.5～62.9mの緩斜面に位置する。根攪乱が著しく、本来の形状は不明瞭ながら、規模は長軸4.10m、短軸1.44mの浅い土坑状を呈する。深さは14cmと浅く、底面も平坦ではないため、掘込みは人為的ではない可能性もある。埋土は炭粒や地山ブロックを含む暗褐色土である。

出土した瓦の多くは根攪乱により原位置を留めていない可能性が高いが、土坑南側では比較的遺存状態が良い瓦片が集中する傾向が窺える。瓦は267点出土し、内訳は平瓦242点、丸瓦25点である。626～635は平瓦で、629は大きさの分かる資料であり、側面長32.6cm、狭端長16.8cmを測る。636～644は丸瓦である。645は熨斗瓦とみられるが、平瓦を半裁ではなく、3分の2程度に分割したと推測できる。

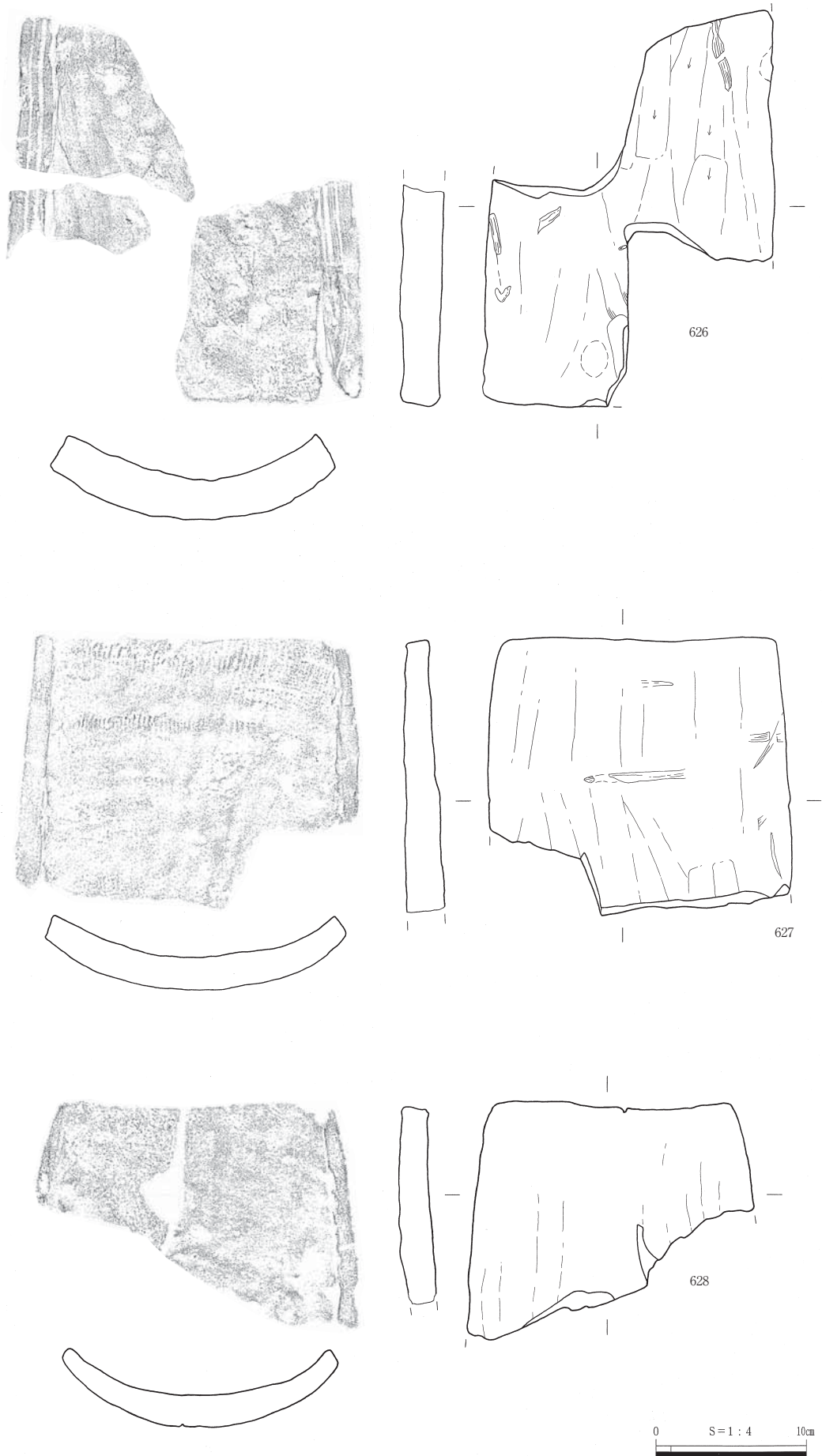
なお、瓦溜まり1より斜面下方のF10・11グリッドでは古代遺物包含層であるII層から瓦が多量に出土している。分布密度は瓦溜まり1に近いほど高く、遠ざかるにつれ散漫になる。したがって、II層として取り上げた瓦の大部分は本来、瓦溜まり1付近に集積されていた可能性が高く、それが斜面下方へ自然に流出していったものと考えられる。

II層から出土した瓦の総点数は677点に及び、内訳は平瓦587点、丸瓦89点、熨斗瓦1点である。

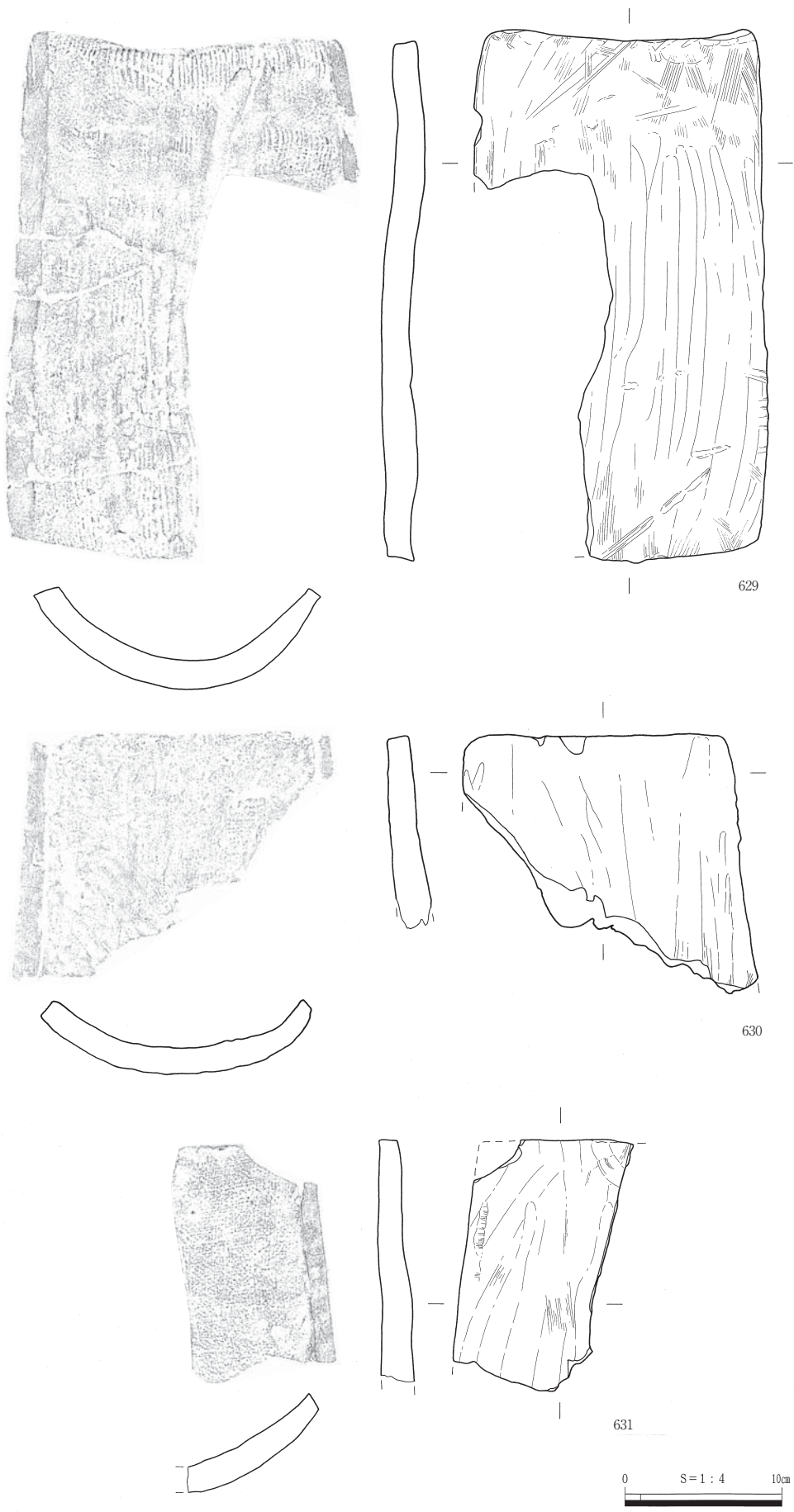


1 暗褐色土 (10YR3/4) φ0.5 cm程の炭粒、φ1 cm程のローマブロック混。

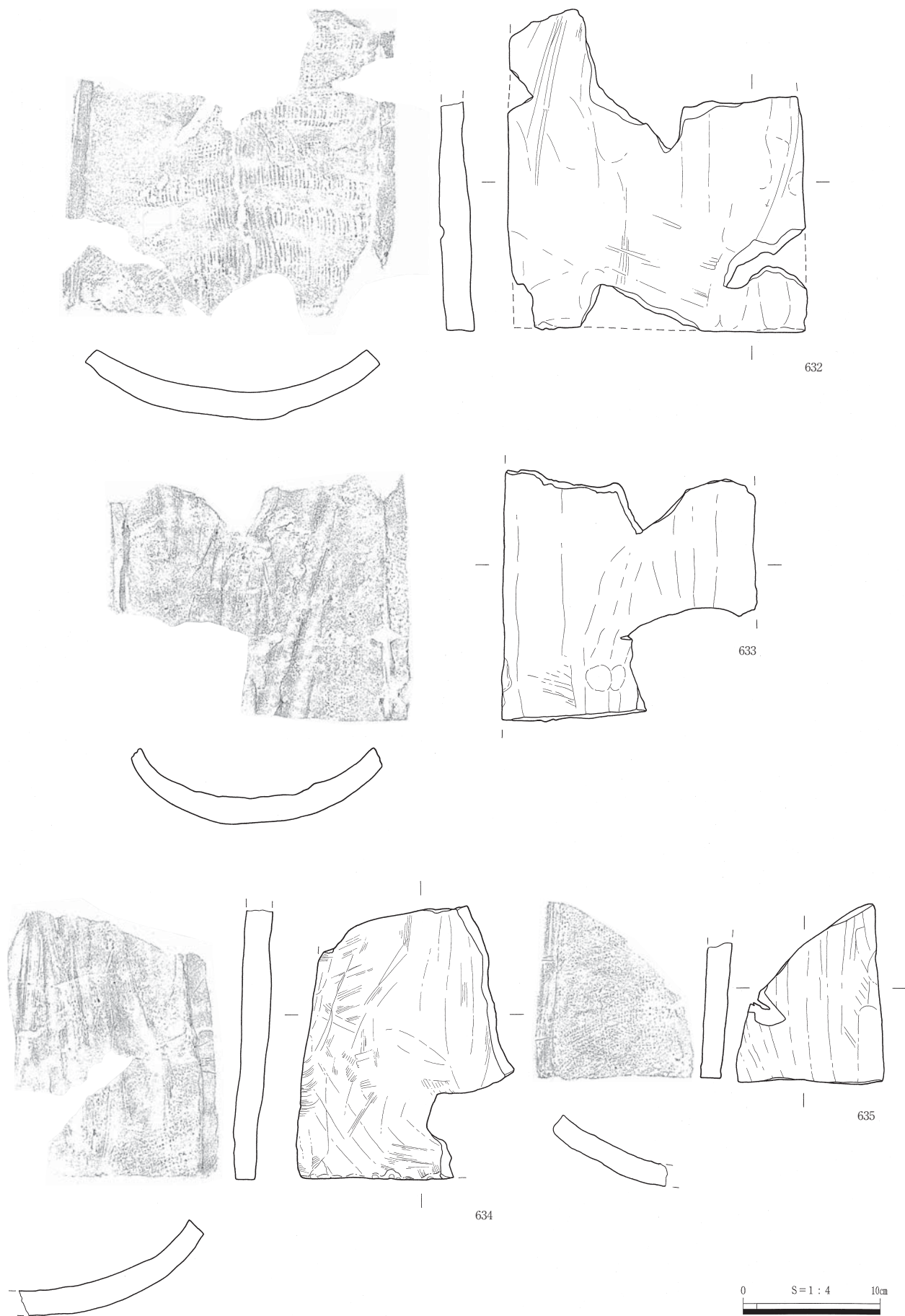
第213図 瓦溜まり1



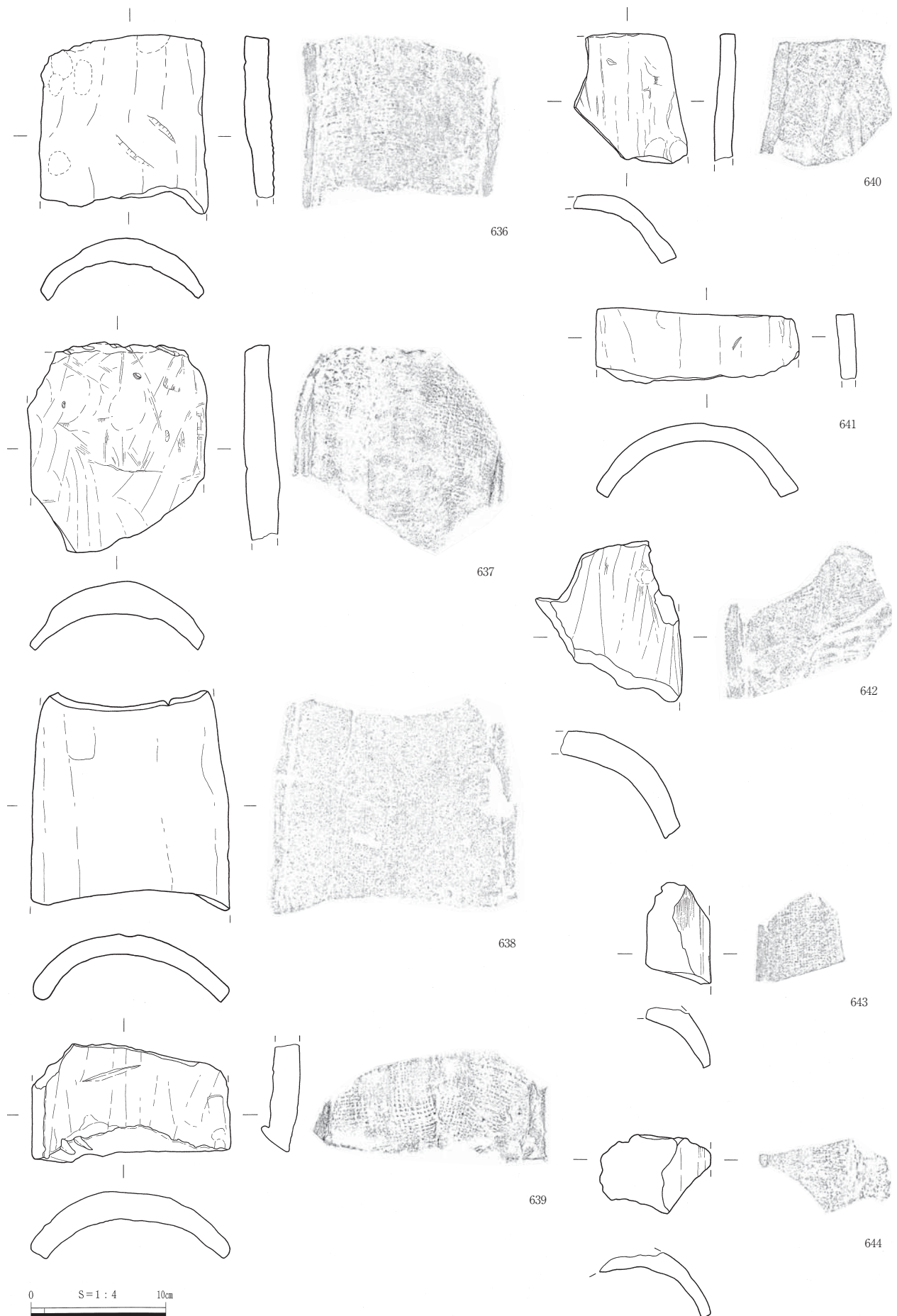
第214図 瓦溜まり1出土瓦(1)



第215図 瓦溜まり1出土瓦(2)



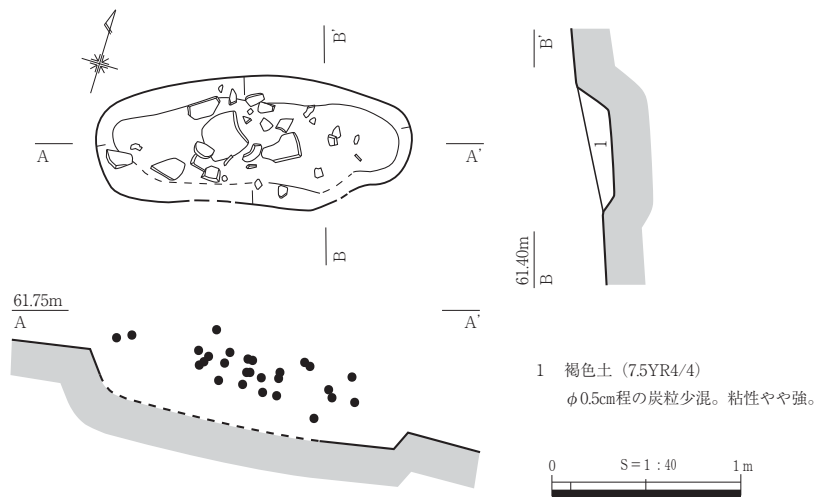
第216図 瓦溜まり1出土瓦(3)



第217図 瓦溜まり1出土瓦(4)



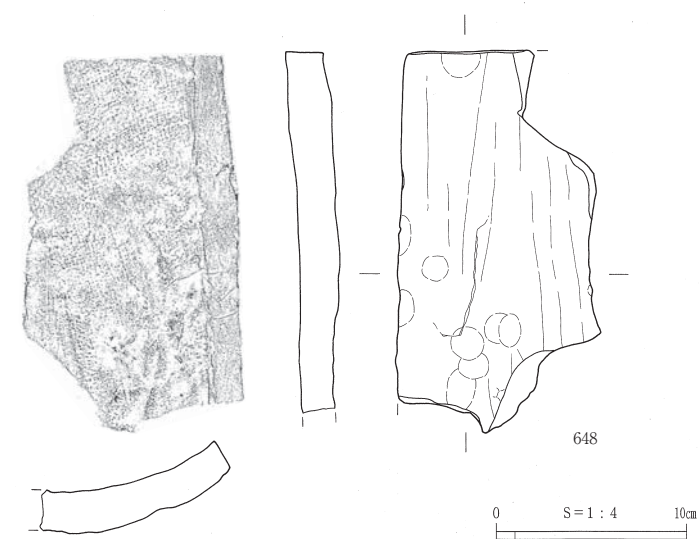
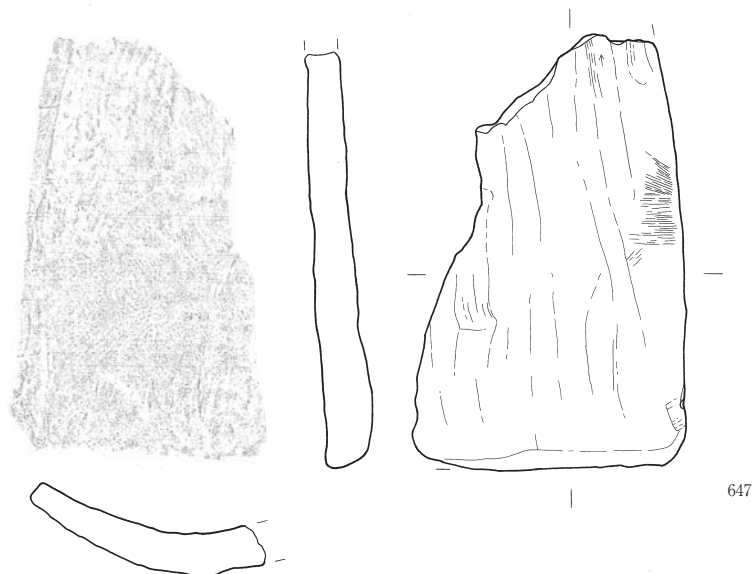
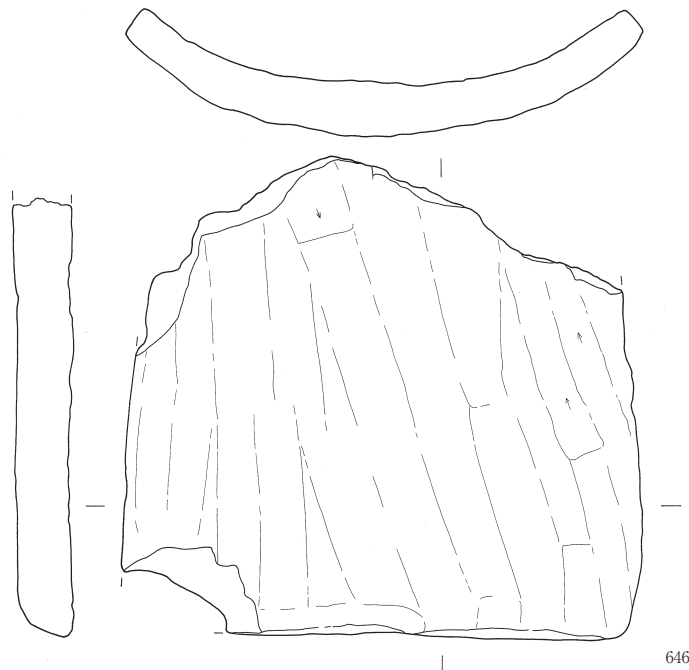
第218図 瓦溜まり1出土瓦(5)



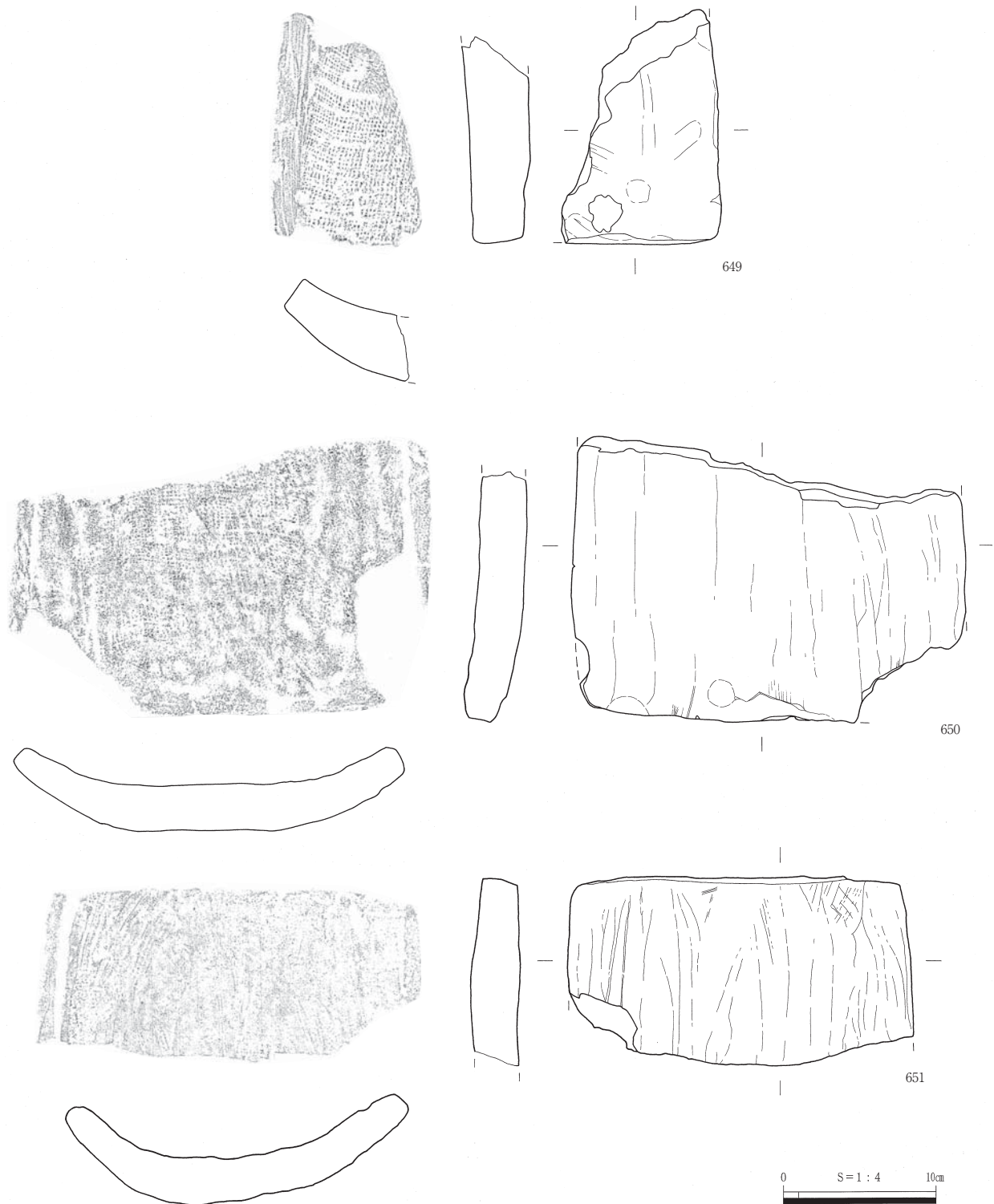
第219図 瓦溜まり2

649～670が平瓦、671～685が丸瓦である。686は熨斗瓦で、側面は一方しか残っていないが、645と法量、胎土、焼成、調整技法などが酷似しており、本来、同一の平瓦である可能性があることから熨斗瓦として報告する。

出土した瓦は製作技法上の諸特徴から窯1、2のいずれかで焼成されたのは確実であり、焼成後、窯より斜面上方の2区に意図的に運び上げられ、集積されたものと考えられる。瓦が集積された意図については、まず、柱穴が確認されていないことや、地形も斜面地であることからみて、周辺に存在した瓦葺建物に利用されたとは考えにくい。瓦を供給地へ運搬する際の一時期的な保管場所などと想定しうるが、なぜ、多量の瓦が供給地に搬出されずにこの場所に放置ないしは廃棄されてしまったのかなど疑問も多く、判然としない。



第220図 瓦溜まり2出土瓦



第221図 瓦溜まり1周辺Ⅱ層出土瓦(1)

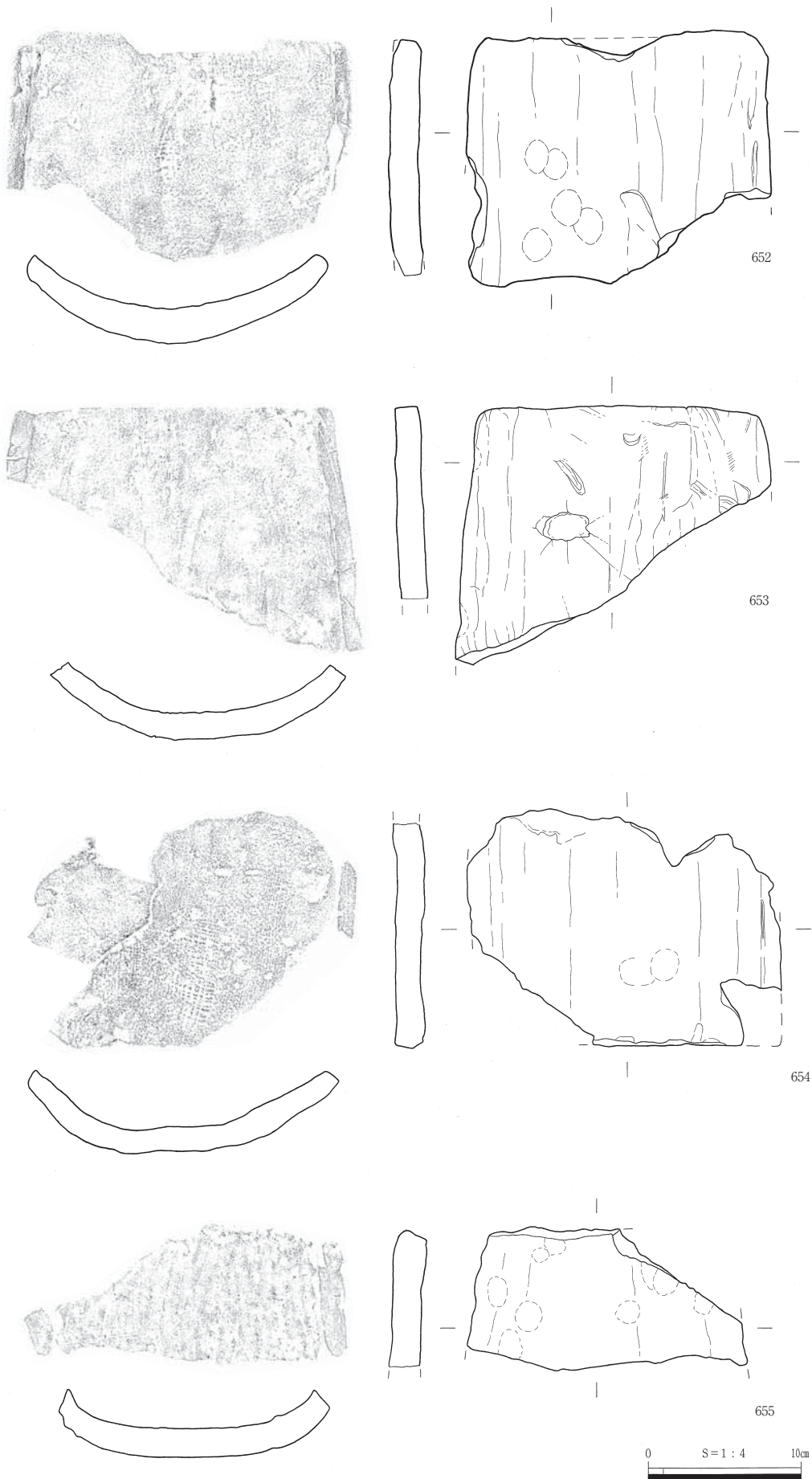
瓦溜まり2(第219・220図、PL.53-5・6、116-2)

F11グリッド、標高61.10~61.56mの斜面地に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.64m、短軸0.70mである。深さは10cmと浅い。埋土は炭粒を含み、粘性のやや強い褐色土である。

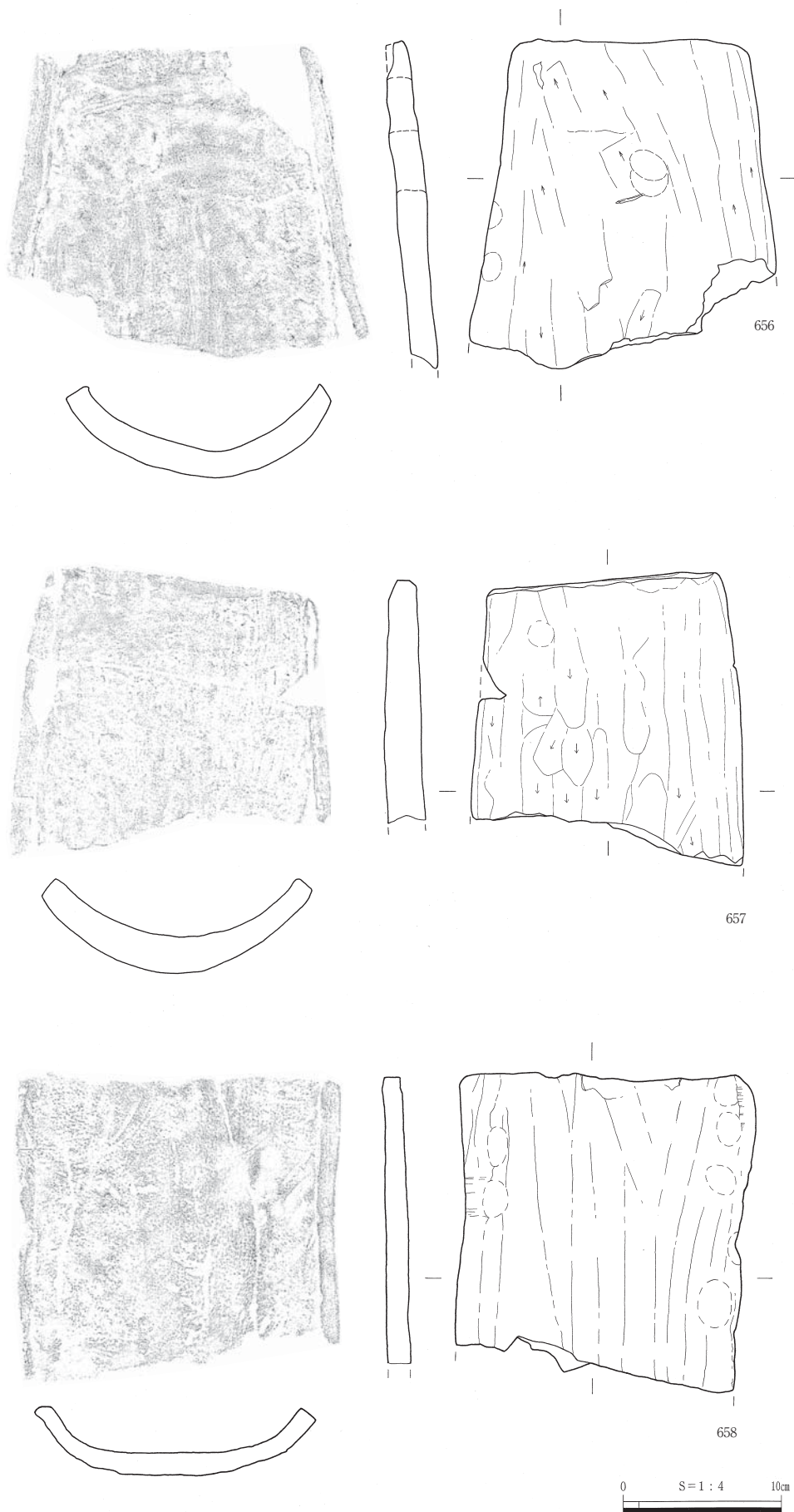
遺物は埋土から瓦40点が出土し、内訳は平瓦39点、丸瓦1点である。646~648は平瓦で、646は広端長27.6cmを測る。

瓦溜りとしたが、瓦は底面付近から出土しておらず、周囲から流入した可能性もある。





第222図 瓦溜まり1周辺Ⅱ層出土瓦(2)



第223図 瓦溜まり1周辺Ⅱ層出土瓦(3)